



Title	ツングース諸語包括形の形態構造に関する考察
Author(s)	白, 尚燁
Citation	北方人文研究, 6, 103-119
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52615
Type	bulletin (article)
File Information	jcnh06-06-BEAK.pdf



[Instructions for use](#)

ツングース諸語¹包括形の形態構造に関する考察

白 尚燁

北海道大学大学院博士課程

0. はじめに

世界の言語の中には一人称複数代名詞に除外形／包括形の区別がある言語が存在する。「除外形」は聞き手を含まない我々で、「包括形」は聞き手を含む我々を指す。本稿は、ツングース諸語における一人称複数包括形（以後‘包括形’と称する）の形態構造に関する先行研究を検討した上で、同形式の形態構造について再考察することを目的とする。また、ツングース諸語以外のアルタイ諸語（モンゴル諸語、チュルク諸語）に見られる包括形（或は包括形的用法をもつ代名詞：以後‘包括形的用法’と称する）の形態構造についても簡単に触れる。

1. 先行研究

第1章ではツングース諸語包括形（人称代名詞）の形態構造に関する先行研究を、その記述に基づき、次の二つに分けて紹介する。

- ①「一人称＋二人称型」説：Ramstedt (1952)，松本 (2007)
- ②「一人称＋複数接辞型」説：Benzing (1956)

1.1. 「一人称＋二人称型」説（以下‘第①説’と称する）

1.1.1. Ramstedt (1952)

Ramstedt (1952) によると、ツングース諸語の包括形用法 (*biti, miti*) には、モンゴル諸語 (*bida*) と同じく、特別な形態形式が存在し、同形式には二人称代名詞の要素 *t-* (モンゴル諸語：*d-*) が見られると記されている。他のツングース諸語と文法的差異が見られる満洲語においても、包括形 *muse* に二人称代名詞（単数 *si* 或は複数 *sue*）の形式がうかがえると指摘している。

In inclusiver Bedeutung, d.h. ‘ich und du’, ‘ich und ihr’, gibt es sowohl im Mongolischen als im Tungusischen besondere Bildungen: mo. *bida*, tung. *biti, miti*, wo man in-*d-*, -*t-* das Pronomen der zweiten Person findet; ma. *muse* ‘ich und du’, ‘ich und ihr’, wo -*se* an *si* ‘du’ od. *sue* ‘ihr’ erinnert.

Ramstedt (1952: 71)

要するに、Ramstedt (1952) は、ツングース諸語の包括形が一人称代名詞と二人称代名詞で構成されていると見ている。

¹ 本稿におけるツングース諸語の分類は、以下のIkegami [2001c (1974): 395]に従う。第I群：エウエンキー語(Ek), エウエン語(E), ソロン語(S), ネギダル語(N)、第II群：ウデヘ語(U), オロチ語(Oc)、第III群：ナーナイ語(Nn), ウルチャ語(Ol), ウイルタ語(Ut)、第IV群：満洲語(M)

1.1.2. 松本 (2007)

松本 (2007) では、ツングース諸語やモンゴル諸語に見られる包括形が、一人称代名詞**m/b-*と二人称代名詞**t/s-*の合成によるものである可能性について触れている。

ツングース語やモンゴル語の包括人称も、満洲語の*muse* (文語形)、ソロン語の*miti*、ウデヘ語の*minti*、あるいは蒙古文語の*bida*、東部裕固語 (Yugur) の*budas*などの形を見ると、どうやら一人称代名詞**m/b-*と二人称代名詞**t/s-*の合成によって生じたもののようである。

松本 (2007: 155)

1.2. 「一人称+複数接辞²型」説 (以下‘第②説’ と称する)

1.2.1. Benzing (1956)

一方、Benzing (1956) はツングース祖語で想定される人称代名詞を以下のように示している。

表1. ツングース祖語の人称代名詞【Benzing (1956: 108)】

1SG	<i>*bi</i>	1PL	<i>*büä</i> (EXC) ~ <i>*mün.ti</i> (INCL)
2SG	<i>*si</i>	2PL	<i>*süä</i>
3SG	<i>*ni</i>	3PL	<i>*ti</i>

同氏はツングース祖語の包括形として**mün.ti*を想定し、同形式が一人称複数除外形の斜格**mün*と集団接辞**-ti*³で構成されている可能性について指摘している。

Die 1. Ps. pl. zeigt (außer im Go. Olč.) zwei Formen, eine exclusive (‘wir ohne euch’) und eine inclusive (‘wir mit euch’). Als Grundform der inklusiven Form kann **mün.ti* angesetzt werden, jedenfalls lassen sich die vorkommenden Formen von ihr aus am einfachsten erklären.

Benzing (1956: 108)

Hierher (zu dem Kollektivsuffix *-ti*: 筆者注) dürfte auch das Pronomen **mün.ti* ‘wir (ich mit euch; inklusiv)’ gehören[中略]. Die Formen sind: ma. *muse*, udh. *minti*, ew. *mit* (dial. *bit*, *mut*), lam. *mut*.

ibid. 72

² Kotwicz 【2004 (1953) : 155】でも、一人称複数代名詞*mit*, *miti*, *mut*, *bit*, *biti*, *bitta*, *butta*の構成要素*-t*, *-ti*, *-ta*は複数接辞で、同形式はチュルク諸語とモンゴル諸語にも見られ、アルタイ諸語まで遡る形式である可能性について触れている。

³ 集団接辞は複数接辞の一種と考えられるため、本稿では複数接辞と見なす。

2. 先行研究の検討

以下では、ツングース諸語包括形（人称代名詞）の形態構造に関する上記の二つの先行研究に対する筆者の見解を述べる。そのため、ツングース諸語の包括形を二つ（前部要素、後部要素）に分けて検討する。下記の表2は、ツングース諸語に見られる包括形を示したものである。

表2. ツングース諸語の包括形⁴

【池上2001b（1971: 432）, Bulatova（1987）⁵をもとに筆者作成】

	I				II		IV
	Ek	E	N	S	U	Oc	M
IPL.INCL	mit-mut	mut	bit(te)-butte ⁶	miti	minti	biti	muse

2.1. 第①説（「一人称＋二人称型」）

2.1.1. 前部要素：*m-*, *b-*（＜一人称代名詞）

第①説によると、ツングース諸語包括形の前部要素は一人称代名詞に由来する形式であると述べられている。上記の表2をみると、ツングース諸語に見られる包括形の前部要素には*m-*, *b-*が共存していることが確認できる。これらの形式は、ツングース諸語の一人称代名詞主格*bi-*（或は*bu*：複数）及び斜格*min-*（或は*mun-*：複数）との類似性が考えられるため、一人称代名詞と関連性があると推定される。しかし、下記の音韻対応に基づくと、包括形の前部要素*m-*, *b-*から包括形の祖形まで遡る単一の子音形式を想定するのは難しいと考えられる。

表3. ツングース祖語の子音対応（語頭）【池上 2001b（1971）：424-425）から一部抜粋】

第I群	第II群	第III群	第IV群	祖語
b	b	b	b	*b
m	m	m	m	*m

2.1.2. 後部要素：-*t*, -*s*（＜二人称代名詞）

次に、第①説による後部要素を見ると、包括形の-*t*は二人称代名詞の形式と関連付けると記されている。この記述は、「聞き手を含む我々」という包括形の意味用法を考えると、一見理にかなった説明であるようである。しかし、上記の表1と下記の表4で示すように、ツングース祖語で想定される二人称代名詞の子音形式

⁴ 第III群のツングース諸語（ナーナイ語、ウルチャ語、ウイльта語）及びエウエン語内のアルマニ方言には包括形が見られないため、除外形／包括形の対立が存在しない【池上2002（1989）：1079参照】。また言語名の略号については、注1のツングース諸語の分類を参照していただきたい。

⁵ Bulatova（1987）はエウエンキー語のアムール方言に関する文法記述である。

⁶ 本稿におけるeの実際の音価は[ə]であるが、便宜上‘e’と表記する。

は*t*-ではなく、*s*-である記述が一般的である。音韻対応（下記の表5参照）から見ても後者の見方が妥当であると考えられる。

表4. ツングース祖語の人称代名詞【池上2001b (1971) : 431-432】

1SG	2SG	1PL.EXC	2PL
*bii	*sii	*buu	*suu

また「包括形に二人称代名詞の要素*-s*が見られる」という説明に関しても、満洲語の包括形*muse*には当てはまるかもしれないが、満洲語以外のツングース諸語包括形（上記の表2参照）に共通して見られる*-t(i)*と対応関係が考えられるかは疑問である。下記の音韻対応に基づいて検討してみても、この可能性（**s* > *t*）は少ないと推定される。以上のことに基づき、筆者はツングース諸語の包括形に二人称代名詞の形式が見られるという第①説に疑問を抱いている。

表5. ツングース祖語の子音対応【語頭, 語中（母音間）】【池上2001b (1971): 425から一部抜粋】

第I群	第II群	第III群	第IV群	祖語
t	t	t ~ č[i]	t ~ č[i]	*t
x~s~š	s~h	s	s	*s

2.2. 第②説 「一人称＋複数接辞型」

2.2.1. 前部要素：**mün-*（＜一人称代名詞）

一方、Benzing (1955) は**mün.ti*を包括形の祖形として想定することで、ツングース諸語に見られる包括形がすべて説明できると記述している。しかし、ツングース諸語の包括形（人称代名詞）を示した上記の表2をみると、一人称の斜格以外に主格に近い形式を前部要素とする包括形も見られる。筆者はこれを裏付ける音韻対応を推定することは難しいと考える（3.1.で後述）。

2.2.2. 後部要素：**-ti*（＜複数接辞）

しかし、包括形の後部要素に関しては、第②説による**-ti*（同形式の由来については第4章で後述）を想定した見解が、上記の表5の音韻対応に基づき、より説得力があると考えられる⁷。

⁷ 但し、この見解にも問題はある。これは、**-ti*を包括形の構成要素として想定した場合、満洲語の包括形*-se*は如何に説明できるかである。上記の表5に基づく、祖語レベルでの**t*は満洲語が属するIV群においては*t~č[i]*と対応関係が考えられる。つまり、今のところ**t*が*s*に変化する保証はない。しかし、満洲語以外のツングース諸語包括形に共通して*-t(i)*が見られることを考えると、包括形の構成要素として**-ti*を想定した方がより妥当であると考えられる。

3. ツングース諸語包括形の形態構造

以下の第3章では、上記のツングース諸語包括形の形態構造に関する先行研究及び問題点に基づき、人称代名詞、語形変化（曲用）、人称接辞（所有構造／定動詞／形動詞）に見られる包括形の形態構造について再検討する。

3.1. 人称代名詞

下記の表6は、ツングース諸語に見られる人称代名詞（三人称は除く）を整理したものである。

表6. ツングース諸語の人称代名詞

【池上2001b (1971) : 431-432), Bulatova (1987) をもとに筆者作成】

	I				II		III			IV	祖語
	Ek	E	N	S	U	Oc	Nn	Ol	Ut	M	
1SG	bi	bi	bi	bi	bi	bī	mī	bi	bii	bi	*bii
2SG	si	xi	sī	ši	si	sī	sī	si	sii	si	*sii
1PL.EXC.	bu	bu	bu	bū	bu	bū	bue	bū	buu	be	*buu
1PL.INCL	mit-mut	mut	bit(te)-butte	miti	minti	biti		bue			muse
2PL	su	xu	sū	sū	su	sū	sue	sū	suu	suwe	*suu

ツングース諸語における一・二人称代名詞の単複（包括形を除く）は、風間（2003b: 288）でも指摘されているように、母音交替（単数形: *-i*、複数形: *-u*）による対立であると考えられる。しかし、包括形にはこの対立が見られず、*-i*と*-u*が混在している。しかも、一部の言語（エウエンキー語、ネギダル語）においては、母音形式に揺れが見られる。下記の第一音節における母音対応に基づいて検討しても、包括形における母音の祖形を想定するのは無理があると考えられる。

表7. ツングース祖語の第一音節における母音対応 【池上2001b (1971): 424から一部抜粋】

I				II		IV	祖語
Ek	E	S	N	U	Oc	M	
u	u	ʈ	u	u	u	u	*ø
u	U	u	o	u	U	u	*U
i	i	i	i	i	i	u	*u
i	I	i	I	i	i	i	*I
i	i	i	i	i	i	i	*i

また上記の2.1.でも触れたように、包括形の前部要素*m-*、*b-*は一人称代名詞との関

連性がうかがえるものの、個々の言語によって異なる子音形式（前部要素）が見られる。例えば、ネギダル語やオロチ語の包括形は、一人称単数または複数の人称代名詞（主格）に基づく形式であることが考えられる。一方、ウデヘ語の包括形は見かけ上一人称単数斜格の語幹と同じ形式を含むようである。それゆえ、祖語レベルでの単一形式を想定するのは難しい。

	1PL.INCL	1SG.NOM	1PL.EXC.NOM	1SG.OBQ
・ネギダル語：	bit(te)~butte	bi	bu	
・オロチ語：	biti	bī		
・ウデヘ語：	minti			min

以上のことに基づき、ツングース諸語の包括形（前部要素）は、その形式から祖形が推定できるモンゴル諸語（5.1.で後述）と違って、音韻対応による規則性が欠如しているため、前部要素の祖形を想定するのが極めて難しいと考えられる。一方、包括形の後部要素に関しては、満洲語を除いたすべての言語に *-t(i)* が見られ、音韻の面においても対応が推定できる。

3.2. 人称代名詞の曲用

次に、ツングース諸語の包括形人称代名詞に見られる語形変化⁸を参照し、その特徴について検討する。

表8. ツングース諸語における人称代名詞の曲用

【Nedjalkov (1997), 風間 (2010a, 2010b), 津曲 (2002a) をもとに筆者作成】

		1SG	2SG	1PL.EXC	1PL.INCL	2PL
I. Ek	NOM	bi	si	bu	mit	su
	ACC	min-e-we	sin-e-we	mun-e-we	mit-we / mit-pe	sun-e-we
	DAT	min-du	sin-du	mun-du	mit-tu	sun-du
II. U	NOM	bi	si	bu	minti	su
	ACC	min-e-we	sin-e-we	mun-e-we	minti-we	sun-e-we
	DAT	min-du	sin-du	mun-du	minti-du	sun-du
III. OI	NOM	bi	si	bū	×	sū
	ACC	mim-be	sim-be	mum-be	×	sum-be
	DAT	min-du	sin-du	mun-du	×	sun-du
IV. M	NOM	bi	si	be	muse	suwe
	ACC	mim-be	sim-be	mem-be	muse-be	suwem-be
	DAT	min-de	sin-de	men-de	muse-de	suwen-de

⁸ 上記の表8は各群から代表言語を選び、それらの言語に見られる語形変化を示したものである。

左記の表8によると、包括形を除いた一・二人称代名詞の曲用は、池上【2001a (1993) : 123 (ウイルタ語)】で指摘されたように、主格と斜格の語幹の形が異なることが確認できる。また主格と同じく、斜格においても母音交替による単複の対立が見られる。一方、包括形の語形変化には、主格の形式がそのまま斜格にも語幹として用いられることが大きな特徴である。また他の人称と違って、母音交替の対立も見られない。したがって、ツングース諸語の包括形には他の人称代名詞と異なる形態特徴が見られると考えられる。

3.3. 人称接辞

下記の表9と表10は、ツングース諸語における人称代名詞及び人称接辞⁹（所有構造／形動詞／定動詞の順）を示したものである。ここでは、包括形の人称接辞について検討する。

3.3.1. 第I群

第I群のツングース諸語における包括形の人称接辞を検討する前に、人称接辞の全体像について簡単に述べる。エウエンキー語、エウエン語、ソロン語では、形動詞と定動詞における人称接辞（包括形と三人称を除く）に差異が著しい。一方、比較的第II-III群のツングース諸語の近くに分布するネギダル語は、形動詞と定動詞の人称接辞がほぼ一致していることが確認できる。

表9. 第I群の人称接辞

	Ek				E				N				S			
	PERS	POSS	PTCP	FINIT	PERS	POSS	PTCP	FINIT	PERS	POSS	PTCP	FINIT	PERS	POSS	PTCP	FINIT
1SG	bi	-w	-w	-m	bi	-w-(b)j-(b)ju-mo-mu	-w	-m	bi	-w	-w	-m	bi	-bi	-ŋ	-ni
2SG	si	-s	-s	-ni	si	-s(i)	-s	-ni	si	-s	-s	-s	si	-s(i)-ci	-s	-ndi
3SG		-n	-n	-n		-n(i)	-n	-n(i)		-n--nn	-n	-n		-nn(i)-ni		-n
1PL-EXC	bu	-wun	-wun	-w	bu	-won--wun--bon--hun--mon--mun	-wun	-u	bu	-wun	-wun	-wun	buu	-mun	-mun	-mun
1PL-INCL	mit	-t	-t	-p	mit	-t(i)-ti	-t	-p	bit(tc)-butte	-t	-t	-p	miti	-t(i)	-ti	-ti
2PL	su	-sun	-sun	-s	su	-san--sen--sun	-san	-s	sū	-sun	-sun	-sun	suu	-sun--cun	-sun	-sun--cun
3PL		-tin	-tin			-tan--ten--tun	-tan			-tin	-tin			-nn(i)-ni		-n

そこで、包括形の人称接辞をみると、第I群の包括形（所有構造、形動詞）は人称代名詞と同じく *-t(i)* が用いられる。この人称接辞 *-t(i)* は、三人称複数の人称接辞 *-tin* と類似した形式でもある。一方、定動詞には包括形の人称接辞 *-p*、*-tti* が現れる。Ikegami【2001b (1992)】では、ツングース諸語の定動詞には定動詞形成要素 **-n* が付いた可能性について指摘している。第I群の人称接辞（定動詞）に **-n* の痕跡が見られるため、その可能性は高いと考えられる。また、Ikegami【2001b (1992) : 390】は、ツングース祖語に遡る包括形の人称接辞として **-pti*¹⁰ を想定

⁹ ツングース諸語の人称接辞を示す表9と表10は、Ikegami【2001a(1984)】、津曲【2001(1992), 2002b (1989), 2003(1988)】、風間 (2003a) に基づいて筆者が作成したものである。

¹⁰ 一方、Ramstedt (1952: 71) は、動詞形式（定動詞：筆者注）に見られる人称接辞 *-p* は、包括形人称代名詞 **biti* が縮約された形であると指摘している。名詞形式（所有構造及び形動詞：筆者）に見られる包括形の人称接辞 *-t* に対しても同じ解釈をしている。

している。これらの先行研究に基づくと、次の音変化 [Ek, E, N: **-npti* > **-pti* > **-pi* > *-p*、S: **-npti* > **-pti* > *-tti*] が推定される。以上のことをまとめると、第I群における包括形の人称接辞（所有構造／形動詞／定動詞）には、人称代名詞と同じく、*-t(i)* が想定できると考えられる。

3.3.2. 第II群¹¹

一方、第II群のツングース諸語では、上記の第I群と違って、形動詞と定動詞に見られる人称接辞¹²が非常に類似している。これは、「定動詞の衰退を伴って形動詞が定動詞に取って代わる過程である【Malchukov (2000) 参照】」ことの結果であるかもしれない。

表10. 第II群の人称接辞

	II						
	U				Oc		
	PERS	POSS	PTCP	FINIT	PERS	POSS	PTCP
1SG	bi	-i~-mi~-bi	-i~-mi	-i~-m(i)	bī	-ji/-wi~-mi~-bi	-wi~-j~-m(i)
2SG	si	-(h)i	-hi	-hi	sī	-si	-si
3SG		-ni	-ni			-ni	-n(i)
1.PL.EXC	xbu	-u~-mu	-u~-mu	-u	bū	-mu/-wu~-bu	-mu
1.PL.INCL	minti	-fi	-fi	-ti~-f(i)	biti	-pi	-pi
2.PL	su	-(h)u	-(h)u	-hu	sū	-su	-su
3.PL		-ti	-ti			-ti	-ti

そこで、第II群における包括形の人称接辞を検討する。一・二人称単複の人称接辞は、母音交替の対立が見られるが、包括形にはこの対立が適用されない。また第II群の包括形には人称接辞（形動詞：*-fi~-pi*、定動詞：*-ti~-fi*）が用いられる。上記と同じく、Ikegami【2001b (1992)】にしたがうと、定動詞の人称接辞には定動詞形成要素**-n*による音変化【**-npti* > **-pti* > *-pi* (> *-fi*) or *-ti*】が考えられる。また第I群の形動詞に共通して見られた包括形の人称接辞*-ti*は、第II群の形動詞には確認できない。これは包括形の人称接辞*-ti*が三人称複数の人称標識*-ti*と同一形式であるため、形動詞の包括形に変化（定動詞用の人称接辞を用いて形動詞の包括形人稱標示）が起こったと推定される。ウデヘ語に見られる包括形の人称接辞*-ti*（定動詞）は、本来の包括形人稱接辞が痕跡として残っているためであると考えられる¹³。したがって、筆者は第II群における包括形の人称接辞にも*-ti*を想

¹¹ 第IVの満洲語には人稱接辞が存在しないため、言及しない。

¹² 第II群のツングース諸語であるオロチ語には、定動詞が形動詞によって吸収され、定動詞と形動詞の区別が存在しない。

¹³ 但し、筆者が実地調査において協力を得たウデヘ語話者（ビキン方言）からは定動詞

定すべきであると考ええる。

以上、人称代名詞、人称代名詞の曲用、人称接辞におけるツングース諸語包括形の形態特徴について検討した。その結果を次のようにまとめる。①包括形の前部要素は一人称代名詞（主格及び斜格）と関連性が考えられるが、諸言語における包括形の前部要素に音韻対応が見られないため、前部要素の祖形を推定するのは難しい。②包括形の語形変化は通常の人称代名詞と異なる性質が見られる。③満洲語以外のツングース諸語の包括形【人称代名詞、人称接辞（所有構造／形動詞／定動詞）】には $-t(i)$ が想定できると考えられる。そこで、以下ではツングース諸語の包括形に見られる $-t(i)$ について検討する。

4. ツングース諸語の包括形に見られる $-t(i)$, $-se$

ツングース諸語において、 $-ti$ は所有構造及び動詞形式における三人称複数を示す人称標識として用いられる形式である。筆者は、三人称複数を示すこの人称接辞 $-ti$ がツングース諸語包括形に共通して見られる $-t(i)$ と関連性のある形式であると見ている。以下に、同形式に関する先行研究を触れながら、この可能性について検討する。さらに、満洲語の包括形に見られる $-se$ についても触れる。

4.1. 満洲語以外のツングース諸語の包括形に見られる $-t(i)$

4.1.1. Ramstedt (1952), Baskakov (1981: 61)

Ramstedt (1952: 56) では、ツングース諸語に複数接辞 $-tAn$ ¹⁴（満洲語： $-tA < -tAn$ ）が見られ、同形式は所有構造や形動詞における三人称複数量示のために用いられる形式であると記している。

Das Tungusische hat für den Plural ein Affix $-tan \sim -ten$, Genetiv $-teni \sim -tni$: *nuŋar-tan* ‘jene, sie’ < ihre Personen, *aknīl-ten*, *aknīl-tni* ‘ihre älteren Brüder’. Es wird gewöhnlich an die als Indikativ verwendeten Partizipialformen angefügt, um die dritte Person des Plurals zu verdeutlichen: *gačatin* ‘sie nahmen’, *gaŋanatin* ‘sie werden nehmen’. [中略] Dieselbe Endung wird im Ma. als das Plural suffix $-ta \sim -te$ wiedergefunden, wobei $-te < *-ten$ die ältere Variante zu sein scheint.

Ramstedt (1952: 56)

Baskakov (1981: 61)でも、ツングース諸語における三人称接辞 $-tan$, $-tin$, $-ti(-či)$ は、複数接辞 $-tan \sim -ten$ に由来するもので、このように複数形式が三人称複数の標識として用いられる現象はチュルク諸語にも見られると記述している。

における包括形の人称接辞として $-fi$ のみ得られ、 $-ti$ は確認できない。

¹⁴ ツングース諸語は母音調和が見られる言語で、Aは接辞の母音語幹の母音によって同化される代表形を指す（以下同様）。

しかし、上記のRamstedt (1952), Baskakov (1981)による複数接辞-*tAn*を同形式の代表形として認めるのは無理があると考えられる。下記の表11で示すように、-*tan*、-*če*のような形式が見られるのは、エウエン語と満洲語のみ¹⁵で、寧ろ-*tin*を代表形として想定した方が、音韻対応の面において妥当であると考えられる。

表11. ツングース諸語の三人称代名詞【池上 2001b (1971: 432)】

	I				II		III			IV
	EK	E	N	S	U	Oc	Nn	OI	Ut	M
3SG	nuʒan	noʒan	noʒan nugan	無	nua	nUʒaɲi	ɲoani	nān(i)	nooni	i
3PL	nuʒar-tin	noʒar-tan	noʒatil noʒal-tin	無	nuati	nUʒan-ti	ɲoan-či	nā-t(i)	noo-či	če

さらに、-*tin*の構成要素である-*n*は三人称を示す形式であるため、複数接辞としては**ti*を想定すべきであると考えられる。以下はツングース諸語に見られる三人称複数の人称接辞が生じるその過程を推定したものである。

①第I群

Stem-*tin* < *Stem-*ti-n*
3PL PL-3SG

②第II群

Stem-*ti* < *Stem-*ti-n*
3PL PL-3SG

4. 1. 2. Benzing (1956)

一方、Benzing (1956: 72) は、本稿の1.2.1.でも述べたように、-*ti*を集団接辞(双数接辞?)と定義した上で、同形式が包括形に用いられる可能性について言及している。同氏はさらにこの形式に限られた語彙にしかその用例が見られないため、その機能を厳密に判断するのは難しいと述べている。

4. 2. 満洲語の包括形構成要素-*se*

満洲語の包括形に見られる-*se*は、最も生産的な複数接辞である-*sA*¹⁶と同じ形式であることについても注目すべきである。

¹⁵ エウエン語と満洲語にこのような音変化 (E:-a<*-i, M:-e<*-i) が起こった理由については今後の課題とする。

¹⁶ 満洲語の複数接辞-*sA*は、注7で述べたように、他のツングース諸語の包括形に見られる-*t(i)*と音韻的に対応している可能性は少ないと考えられる。寧ろ、満洲語における他の複数形式-*tA*が、包括形の-*t(i)*と対応する可能性が高い。これに基づくと、満洲語の包括形はツングース祖語以後の段階で、他の言語の影響によって生じたかもしれない。

amban 「大臣」	amba-sa	gucu 「友人」	gucu-se
monggo 「モンゴル人」	monggo-so	jui 「子、息子」	ju-se

津曲 (2002a: 72)

以上のことに基づき、ツングース諸語の包括形（後部要素）に共通して見られる *-t(i)*、*-se* は、複数接辞に由来する形式であると考えられる。

4.3. 第4章のまとめ

以上ツングース諸語包括形の形態構造に関して検討した。その結果、包括形の前部要素は一人称代名詞の主格や斜格と類似しているため、一人称代名詞との関連性が考えられる。しかし、音韻対応に基づいて包括形の祖形（前部要素）を規定することは極めて困難であると考えられる。一方、包括形の後部要素では **-ti* が想定され、これはツングース諸語の複数接辞に由来する形式であると推定される。下記の図1は、ツングース諸語包括形の分布を示したものである。

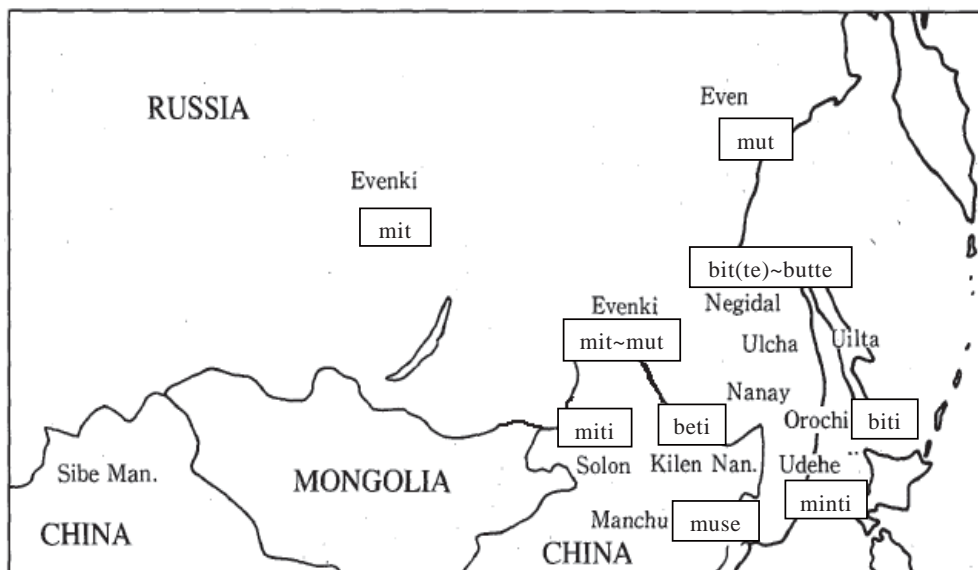


図1. ツングース諸語包括形の分布¹⁷【Tsumagari (1997) の言語分布図に包括形式を加筆】

5. 他のアルタイ諸語における包括形（或は包括形的用法）の形態構造

そこで、ツングース諸語以外のアルタイ諸語（モンゴル諸語、チュルク諸語）に見られる包括形（或は包括形的用法）の形態構造についても簡単に触れる。

¹⁷ 上記の Kilen Nan. はホジェン語を指し、ホジェン語の包括形 *beti* は（李2006）によるものである。

5.1. モンゴル諸語

ツングース諸語、チュルク諸語とともにアルタイ諸語を成すモンゴル諸語にも包括形が見られる。しかし、今日のモンゴル諸語では、下記の表12で示すように、一部の言語にしか除外形／包括形の対立が存在しない。これは、除外形が包括形によって吸収された結果であると考えられる。また、言語によって異なる包括形の形態構造が見られたツングース諸語に対し、モンゴル諸語の包括形はその形式に規則性が見られ、包括形の祖形が推定できる。

表12. モンゴル諸語の人称代名詞 (Janhunen 2003に基づいて筆者が作成)

	1SG	2SG	3SG	1PL.EXC	1PL.INCL	2PL	3PL
proto-mongolic	*bi	*ci	*i/*ene,*tere	*ba	*bi-da	*ta	*a/*ede, *tede
Khamnigan	bi	ci	ene/tere		bi-de	ta	e-de/te-de
Buryat	bi	shi	ene/tere		bi-de	ta	e-de/te-de
Dagur	bii	shii	ing/en,ter	baa	bie-d	taa	aang/ed,ted
Khalkha	bi	ci	ene/ter		bi-d	ta	e-d/te-d
Ordos	bi	ci	ene/tere		bi-da	ta	e-de/te-de
Oirat	bii	cii	en/ter	maanr	bi-d	taa	e-d/te-d
Kalmuck	bi	ci	en/ter	madn	bidn	ta(dn)	e-dn/te-dn
Shira Yughur	bi~bu	ci	ene/tere	buda	bu-da-s	ta	ene-s/tere-s
Mongghul	bu~ndaa	qi	ne/te	ndaa(sge)~buda(sge)		ta	ne-sge/te-sge
Bonan	be	ce	ine~ne/tere~te	man'ge	bede	ta	ine-la/tere-la
Santa	bi	chi	tere~hhe	matang	bidien	ta(n)	tere-la~hhe-la

モンゴル諸語における包括形の形態構造は、Ramstedt (1952), Janhunen (2003) による記述のように、一人称代名詞＋二人称代名詞で構成されているという見方が一般的である。

The new pronoun was of a compound origin, consisting of sg. 1p. *bi and pl. 2p. *ta, i.e. *bi+ta I and you > *bida (also>*bide).

Janhunen (2003: 19)

しかし、Domii (2006)¹⁸によると、包括形**bida**に見られる**-da**は複数形式**-dan**に由来すると記述されている。同氏はその理由を以下のように示している。モンゴル文語には包括形として**bidan**のみ見られ、語形変化においても、**bida**ではなく、**bidan**に基づいて**bidan-u**, **bidan-dur**, **bidan-i**, **bidan-iyar**のように曲用する。今日のモ

¹⁸ Domii (2006) によるこの記述は筆者は未見で、Nevskaya (2010) の記述から再引用したものであることを断っておく。

ンゴル諸語においても包括形語形変化の語幹は*bidan*, *beden*, *budan*である。さらに、この複数形式*-dan/-den*は三人称指示代名詞**e-/*te-*の複数形*eden/teden*でも見られる。以上のことに基づき、Domii (2006) はモンゴル諸語の包括形には複数接辞要素を含んでいる可能性について指摘している。これに基づく、モンゴル諸語の包括形も、ツングース諸語と同じく複数接辞で構成された可能性が考えられる。

5.2. チュルク諸語¹⁹

Poppe (1965: 192) によると、多くのチュルク諸語には除外形／包括形の対立がないが、ウズベク語のキバ方言には包括形があると記述されている。このキバ方言の包括形は複数接辞 (*-lar*) で構成されているように見える。

The opposition of *incl.* versus *excl.* is found only in few Turkic languages, e.g., in the Khiva dialect of Uzbek: *bizlär* “we” (*incl.*) and *biz* “we” (*excl.*)

Poppe (1965: 192)

Ubrjatova (1991) もチュルク諸語の代名詞*biz-ler*タイプ (一人称複数＋複数接辞) には包括形の機能があると見なしている。Isxakov (1956) によると、このような複合形式はアルタイ語、トゥバ語、キルギス語、カザフ語等にみられると記されている。しかし、チュルク諸語のこうした複合形式には、包括形の意味ではない用法も見られるため、チュルク諸語の包括形を認めない記述【Nevskaya (2005)】も存在する。言い換えれば、チュルク諸語において包括形を認めるべきかについては異なる見方が提示されているが、複数接辞を用いる包括形的用法が存在することは興味深い。

以上、第5章ではツングース諸語以外のアルタイ諸語に見られる包括形 (或は包括形的用法) の形態構造に関する先行研究を参照した。その結果、これらの言語の包括形 (或は包括形的用法) にも、ツングース諸語と同じく、複数接辞が共通して用いられるという記述が見られる。但し、この見方に関しては、モンゴル諸語包括形の分析、チュルク諸語の包括形的用法を認めるかなど、更なる検討が必要であるため、本稿ではその可能性を提起することにとどめる。

6. まとめ

本稿ではツングース諸語に見られる包括形の形態構造について考察を行った。包括形の形態構造に関する従来の先行研究では、①「一人称＋二人称型」説と②「一人称＋複数接辞型」説のように二つの可能性が提起されてきた。本稿で、それぞれの見方に対して検討を行った結果、ツングース諸語の包括形はモンゴル諸

¹⁹ Isxakov (1956), Ubrjatova (1991) も原文は筆者未見で、以下の記述はNevskaya (2005) によるものである。

語と違って、包括形の前部要素に音韻対応が想定できないため、祖形に遡るのは極めて難しいと考えられる。しかし、包括形を成す後部要素は、Kotwicz【2004 (1953)】、Benzing (1956) が述べたように、音韻対応関係から見て複数接辞に由来する可能性が考えられる。また、ツングース諸語以外のアルタイ諸語（モンゴル諸語、チュルク諸語）においても、包括形（或は包括形的用法）が複数接辞を構成要素に含むという指摘が見られる。以上のことに基づくと、アルタイ諸語は複数接辞で包括形（或は包括形的用法）を成す可能性が考えられる。但し、これに関しては更なる検討が必要であるため、今後の課題とする。

略号一覧

1, 2, 3: 1 st person 2 nd person, 3 rd person	OBQ: oblique
ACC: accusative	PERS: personal pronoun
DAT: dative	PL: plural
EXC: exclusive	POSS: possessive
FINIT: finite	PTCP: participle
INCL: inclusive	SG: single
NOM: nominative	

【謝辞】

本稿の作成にあたって、日頃より丁寧かつ親切にご指導を下さった津曲敏郎先生に深く感謝の意を表したい。また査読者の先生からも貴重なご教示や指摘を頂いた。ここに記して深く感謝申し上げたい。当然ながら、本稿における全ての誤りは筆者に帰するものである。

参考文献

池上二良

- 2001a 「ウイльта語代名詞とその格変化」『ツングース語研究』: 121-130. 東京: 汲古書院 (初出: 1993 札幌大学女子短期大学部創立25週記念論文集所収: 363-371)
- 2001b 「ツングース諸語の変遷」『ツングース語研究』: 397-445. 東京: 汲古書院 (初出: 1971 『言語の系統と歴史』岩波書店所収)
- 2002 「ツングース諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第2巻 世界言語編 (中): 1058-1083 東京: 三省堂 (初版: 1989)

風間伸次郎

- 2003a 『エウエン語テキストと文法概説』 (ELPR publication series: A2-030, ツングース言語文化論集23) 吹田: 大阪学院大学情報学部
- 2003b 「アルタイ諸言語の3グループ (チュルク、モンゴル、ツングース)、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか—対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン/長田俊樹共編『日本語系統論の現在』日文研叢書31: 249-340 京都: 国際日本文化研究センター

2010a 『ウデヘ語テキスト6』（ツングース言語文化論集47）東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2010b 『ウルチャロ承文芸原文集5』（ツングース言語文化論集49）東京：東京外国語大学

津曲敏郎

2001 「ネギダル語」:19-21, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第3巻 世界言語編（下-1）東京：三省堂（初版：1992）

2002a 『満洲語入門20講』東京：大学書林

2002b 「ソロン語」:522-523, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第2巻 世界言語編（中）東京：三省堂（初版：1989）

2003 「エウエンキー語」:884-886, 「エウエン語」:882-884, 「ウデヘ語」:834-836, 「オロチ語」:1115-1116 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第1巻 世界言語変（上）東京：三省堂（初版：1988）

松本克己

2007 『世界言語のなかの日本語』東京：三省堂

李 林静

2006 『ホジェン語の動詞構造』【博士論文】千葉大学大学院社会科学文化研究科

Baskakov, H. A.

1981 *Altajskaja Sem'ja Jazykov i eje izuchenie*. Moskva: Nauka.

Benzing, J.

1956 *Die tungusischen Sprachen: Versuch einer vergleichenden Grammatik*. Mainz: Akademie der Wissenschaften und der Literatur.

Bulatova, N. J.

1987 *Govory Evenkov Amurskoj oblasti*. Leningrad: Nauka.

Domii, T.

2006 The Inclusive and the Exclusive in Mongolian. In: Shagdarsuren(s), Ts. (eds.) *Mongol Ulsin Ix Sürgүүлйн. Erdem šinžilgeenij bičig. Acta Mongolica*, Volume 6 (267): 77-78. Ulaanbaatar: National University of Mongolia.

Ikegami, J.

2001a The category of person in Tungus: Its representation in the indicative forms of verbs. *Tsunguusugo kenkyuu*: 369-379. Tokyo: Kyuukoshoin (First appeared in: 1984 *Proceedings of the Thirty-First International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa in Tokyo-Kyoto 1983*: 332-333, The Tōhō Gakkai).

2001b The element *-n* in the indicative forms of verbs in Tungus languages. *Tsunguusugo kenkyuu*: 380-394. Tokyo: Kyuukoshoin (First appeared in: 1992 *Proceedings of the XXXII International Congress for Asian and North African Studies, Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Supplement IX: 195).

- 2001c Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprache. *Tsunguusugo kenkyuu*: 395-396, Tokyo:Kyukoshoin (First appeared in:1974 Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker, Protokollband der XII. *Tagung der Permanent international Altaische Conference 1969 in Berlin*: 271-272, Berlin Akademie Verlag).
- Isxakov, F. G.
1956 Lichnye mestoimenija. In N.K. Dmitriev (eds.), *Issledovanija po sravnitel'noj grammatike tjurkskix jazykov*, Volume 2. Morfologija: 208-263. Moskva: Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR.
- Janhunen, J. (ed.)
2003 *The Mongolic Languages*. London/New York: Routledge.
- Kotwicz, W.
1953 *Studia nad jazykami Altajskimi* (in Polish). *Aertai zhuyuyan yanjiu* (=Study on Altaic languages), translated in Chinese by Hasi et al. 2004. Huhehaote: Neimengguchubanshe.
- Malchukov, A. L.
2000 Perfect, evidentiality and related categories in Tungusic languages. In L. Johanson & B. Ultas (eds.) *Evidentials: Turkic, Iranian and neighbouring languages*: 441-469. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Nedjalkov, I.
1997 *Evenki*. London/New York: Routledge.
- Nevskaya, I.
2005 Inclusive and exclusive in Turkic languages. In E. Filimonova (eds.) *Clusivity : typology and case studies of the inclusive-exclusive distinction*: 341-358. Amsterdam: J. Benjamins.
2010 Inclusive and exclusive in Altaic languages. Lars Johanson, Martine Robbeets (eds.) *Transeurasian Verbal Morphology in a Comparative Perspective: Genealogy, Contact, Chance* (Turcologica 78): 115-128. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Poppe, N.
1965 *Introduction to Altaic Linguistics*. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- Ramstedt, G. J.
1952 *Einführung in die altaische Sprachwissenschaft*, II Formenlehre. Helsinki: Suomalais-ugrilainen Seura.
- Tsumagari, T.
1997 Linguistic diversity and national borders of Tungusic. H. Shoji & J. Janhunen (eds.) *Northern Minority Languages: Problems of Survival (Senri ethnological Studies no.44)*: 175-186. Osaka: National Museum of Ethnology.

Ubrjatova, E. I.

- 1991 Eshche raz ob iskljuchitel'nosti (ekskljuzive) i vkljuchitel'nosti (inkluzive) v jakutskom jazyke. In E. I. Ubrjatova & M.I. Cheremisina (eds.), *Jazyki narodov Sibiri: Grammaticheskie issledovanija*: 3-11. Novosibirsk: Nauka.

Morphological Analysis of Inclusive Forms in Tungusic

Sangyub BAEK

Graduate School of Letters, Hokkaido University

Most of the Tungusic languages have two forms (inclusive/exclusive) in the first plural pronoun, depending on whether it includes the addressee or not. It is possible to divide the previous works on the morphological analysis of Tungusic inclusive forms into the following two ways: 1) Tungusic inclusive consists of the first and second person pronoun, 2) it is composed of the first person pronoun with plural suffix in it. Reexamining these two studies above, this paper aims to clarify the morphological structure of inclusive in Tungusic by focusing on inclusive forms in the personal pronoun, declension and personal suffix. In conclusion, it is presumed to be difficult to determine how to reconstruct the base element of Old Tungusic inclusive forms since there is no solid phonological correspondence to prove it at the present stage. However, the chance that Tungusic inclusive has the plural suffix in it is considered to be high like some previous works mentioned. In addition, there have been some previous studies on inclusive or inclusive-like function with plural suffix in other Altaic (Mongolic, Turkic). Therefore, there may be a possibility in composing inclusive or inclusive-like function of using the plural element in the Altaic languages.